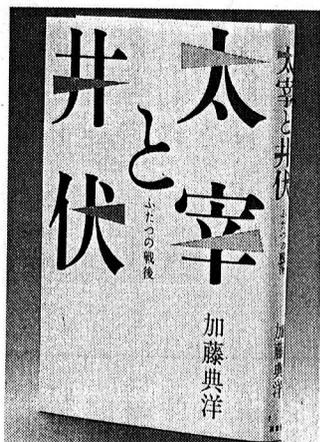


「太宰と井伏 ふたつの戦後」

加藤 典洋著



数度の自殺未遂と心中未遂、薬物中毒による入院、作家として絶頂期での女性との入水自殺。太宰治ほど、破天荒な「生」そのものがスキャンダラスに語られてきた作家はいないかもしれない。

この書は、彼の没後発表された『人間失格』を中心に、師である井伏鱒二の影を探り、「ギリギリのところ」で、正直に「作中に描き出されている井伏への思いに迫ろうとする。

周知のように『人間失格』は、それまでの太宰の実人生の「事実」を並べ替え、主人公「葉蔵」の手記として語られている。作者はここで現実には照応する人物がない「堀木」と、なぜか作品に登場しない井伏に着目する。両者を結びつける試みは、既に他の論者も行い、それらを評価しつつも、鍵を握るとされる太宰夫婦がモデルで登場する井伏の作品『菓屋の雛女房』の解釈に異論を唱える。

深い畏敬にじむ作家論

▲講談社・1575円

これまで、精神病患者（太宰）の描き方に二人の信頼関係を断絶させる要因があったとする諸説に、心中未遂後離縁した妻（小山初代）を井伏が予想外に温かな筆致で描いていたことが太宰には衝撃だったとする。しかも、井伏が抱いた離縁に対する非難を、太宰は嗅ぎとった。当然、執筆中だった『人間失格』の「堀木」の像に、彼への屈折した感情は投影されることになる。

さらに『散華』『姥捨』『ヴィヨンの妻』と関連する作品が随所に挙げられ、自死の直前の心理を、重層的に読み解いていく。特に戦後に生き残った「後ろめたさ」と「文学者としての責任感」は、それまで作品を書くことととれてきた心のバランスを崩壊させるに充分だったと指摘する。終盤は三島田紀夫の『仮面の告白』との対比、死の符合性が語られ、二十数年を隔て互いに「正義」という苦悩に倒れたことを宿命として位置づかせる。

『黒い雨』の有名な「正義の戦争より不正義の平和の方がいい」という「重松」の科白が『人間失格』への井伏らしい返歌だとするくだりは、作者の両者への深い畏敬が感じられ、二者のユニークな作家論とも言えそうだ。評・宮本誠一（NPO夢屋フナネット代表）